

真名本『曾我物語』の頼朝像

田川邦子

真名本をはじめとする『曾我物語』の諸本、幸若舞曲、近松浄瑠璃の曾我物に至るまで、通読すれば、この物語の世界の中心に座を占める「頼朝」という人物の存在が、如何に大きく全体を支配しているかを、改めて痛感せざるを得ない。

たとえ頼朝その人は登場しなくとも、物語の背景には、頼朝の存在や意志が明確に意識されているのが普通である。中心人物の十郎・五郎兄弟をはじめ、周辺に活躍するあらゆる人物の行為や心理は、物語の全空間を支配する頼朝とのかかわりの中に、揺れ動く。そのかわりは直接、間接さまざまだが、作者の意識には頼朝の存在は絶対である。

頼朝の権威と物語の全世界はパラレルであると同時に、両者を抱えこむ物語空間は、限定された世界から一步も出ることはない。まさに〈在地の物語〉なのである。

頼朝との関連で把握され、位置づけられるもう一つの悲劇、義経物語の方には、まだ救いがあると言ってよい。

義経には短い生涯のほんの一時期にしろ、華々しい活躍の時間が

あった。また頼朝との不和の原因にしても、ただ単に運が悪かったというだけでは済まない、測定可能な客観的条件が幾つか挙げられる。そのなかには義経自身の責任といってもよい、京都鎌倉間の政治的関係を読み解く、判断力の乏しさをあげることもできる。

義経物語の空間は、頼朝一人が統御する世界ではない。京都には後白河院、東北には藤原氏があり、頼朝の政治力といえども、これらのすべてを意のままにすることは、まだできていない。義経はこの三者とかわりながら、転々とすることで、その生涯を綴る物語空間も、また全国的規模に拡大する。

これに対し『曾我物語』は、どの本も伊東氏一族の内紛から語り起す。兄弟は桶見地方(伊豆半島東部、伊東・宇佐美・河津を含む地域)を支配する豪族、伊東氏の嫡流に生まれながら、一族を二分する領地争いが原因で、幼少の頃父を、叔父の宮藤助経(工藤祐経)に討たれる。

再婚した母に連れられ、曾我の里に移り住み、継父曾我助(祐)

信に養われる身になったとはいへ、一連の事件はこの段階では、武家社会につきものの、所領をめぐる内紛でしかない。武家政権が確立し、公平な裁定を得るときには、兄弟の立場は充分に同情すべきものとして扱われる可能性もあつたはずである。

その兄弟の運命を決定的にしたのは、彼らの祖父伊東入道（助親）が、流人の頼朝を冷酷に扱ったばかりか、拳兵の折には激しく対立したことに始まる。平家全盛の世の中なので、無理もないことではあつたが、もたらした結果は悲劇であり、悲劇はさらに悲劇を招くのであつた。

一連の頼朝流離譚のなかで、北条政子と頼朝の恋の物語は、なんととっても劇的である。歴史的に見ればこの恋には、北条氏の政治的命運がかかっていたばかりか、関東の武家集団の政治地図、ひいては中世日本の構図を決定するほどの重大事であつたといつても過言ではない。それだけに伊東氏の頼朝排斥は、悪運としか言いようのないほど、結末は悲惨なものとならざるを得ない。その伊東氏悪運の結末を、一人背負い込むのが、十郎・五郎の若い兄弟たちであつたといえる。彼らの悲運の物語が、頼朝流離譚と共に語り始められることに、それは何よりも象徴されるのである。

伊藤一族の領地争いから語り出される『曾我物語』であるが、失つた所領への思いや執着が、この作品の主要なテーマになっているわけではない。領地の問題は内側に秘められ、物語の主旋律はやはり「復讐」である。夫を失つた若い母親が、五歳と三歳の兄弟に言い聞かせる言葉。

己等父討ニ宮藤一郎助經ニ、未レ成ニ貳拾ニ其前助經首取見レ我レ（己らが父をば宮藤一郎助経が討つたんなるぞ。未だ貳拾にならざらむ

その前に、助経が首を取って我に見せよ）

この憎しみの心から発する復讐の情念が、兄弟、特に兄の一万（十郎）の心に染み通り、主題は表向き領地争いから復讐への転換するのである。

一万が子供心に復讐を誓う神々は「二所権現（箱根・伊豆山）、三嶋大明神、足柄富士浅間大菩薩、殊氏大神」で、特に箱根・伊豆山の二所権現と氏の大神が主要な位置を占めている。みな在地の神々である。この母から子へ移植される復讐の情念と、祈りの対象である在地の神々、『曾我物語』の世界ではこの二つが作品を支える精神性の要になつている。一見取りつきの悪い真名本の表記から神々への信仰はともかく、女の情念や意志を汲み取るのは難しそうに見えるが、これを抜きにしては「曾我」は語れないのは事実である。

では「領地」の回復はどうなるのか。頼朝政権下でこの問題は、表だつて口にするのも憚られる重大事であつたに違いない。巻第五で「有ニ便宜ニ申ニ訴詔ニ被レ思ニ合ニ引ニ助ニ」（便宜あらば訴訟申して引き助けんと思ひ合はるる）とあるのは、伊藤氏と血縁のある在地豪族が、機会を見て兄弟のために訴詔（訟）をしたいと思つていたということで、これは領地問題を暗示している。これ自体が非常に漠とした書き方で、何も実行しないうちに、兄弟は死んだのである。

メルヘン的手法で構成される、近世の時代浄瑠璃ならともかく、在地武士団の現実に着する『曾我物語』には、領地は在地の側からの希望や空想では語れない、現実の重圧そのものであつたといえる。

その現実とは、頼朝の支配する現実である。頼朝の権力行使の最

たるものが〈領地〉にあるから、頼朝像を描くときにのみ、〈領地〉は無闇に事多く、派手に過剰にとりあげられるのである。

巻第五では、「鷹談義」の恩賞として、畠山重忠に「奥州云三紗河・公田」「三千八百町」の他に、「武藏上野兩國惣追捕使」の役が与えられ、「三原・長倉」の狩では、連歌や和歌の引出物として、梶原景時に「駿河久能拾貳郷」、海野小太郎に「宮崎十八郷」とある。

さらに宇都宮の女房の活躍が描かれ（巻第六）、「常陸国伊澤郡」の「六十六郷」が彼女に贈与され、夫の朝綱にも、賢女を妻に持つ妻美として「陸奥国信夫庄」が与えられる。梶原景時の和歌の才に対しては、この他に「武藏国玉川七郷」の引出物もあった。

権力者頼朝の、これら派手で気前のいい大盤振舞いを描くことに並行し、その陰に在る兄弟の姿を同時に点描するのが、『曾我物語』の常套的な手法なのである。

建久元年十一月、頼朝初度上洛の折、千葉・三浦・此企・足立・和田・梶原など十人の将兵に官位が授けられる、晴れがましい場面が描かれる（巻第四）。続いて兄弟の父河津三郎を討った、宮（工）藤助経に筆が及び、左衛門尉に任じられたこと、伊東入道に不当に奪われていた伊東の荘を回復した上、その他の莊園田畑をも沢山賜った旨が記される。日夜君側を離れない「稠者」（きりもの）の助経は、これで頼朝政権下における、御家人としての地位が安定したのである。

名月の夜空を渡る雁の列を見上げ、幼い兄弟が父の不在を嘆く、例の有名人な場面はこの後に続くのであるが、この展開はなかなか妙を得て心憎いところがある。頼朝のもとに馳せ参じ、功名を挙げ、て官位を授かり、領地を安堵して、御家人の地位を固める、在地の

豪族群像。敵の助経もまたその例外ではない。これに対し、重なる不運に零落する、名門伊東・河津の子孫である二人の兄弟。このコントラストは鮮やかであり、それが〈父不在〉を嘆く、幼い子供の心理や感性を通し表現されるので、切実感が盛り上るのである。

この時代特に東国は、〈男〉の世界であり、〈父親〉の時代であったはず。武門に生まれた男は、幼時から実戦に備え技と肉体を鍛えなければならぬ。その手本は父親であり、よき指導者は、我が子に領地相続を期待する父親を置いては、他にいないはずである。

二人の兄弟が子供心に、継父助信に不信を抱くのは、助信が妻の連れ子の二人に、武門の子としての教育を施そうとしないことにある。実の父親河津三郎ならば、決してこうはなかつたはずだというのが、父親思慕の感情を増幅させるのだ。

これを逆に助信の立場から見ればどうなるのか。弱小豪族の曾我に、妻の連れ子に与える領地の余裕があるか否かの問題ではない。彼らは「謀叛人」伊東入道の嫡孫である。伊東入道は頼朝の子を殺し、旗挙げの折には敵に回り、叛逆した人物である。頼朝政権下でその孫たちが、領地安堵を保証され、武家として自立するのはまず不可能である。こういう場合、当時としては武門より仏門へというのが、もっとも妥当な選択の方向であったといつてよい。

兄弟の継父曾我助信（祐信）については、真名本、仮名本共に誠意ある人物として描いている。謡曲『切兼曾我』、舞曲『満箱王』に描く、由比の浜へ引かれ、斬られるところを、命乞いで助かる話は、仮名本にはあるが（巻第三）、真名本はなぜか正面から取り上げるのを避けている。しかしこの話の痕跡は留めているのであって、母親の言葉として、

其上汝等被_レ召_レ鎌倉・時曾我殿敷申田留_メ（巻第四）
というのは、この話を指している。

仮名本では諸將が命乞いをし、最終的には畠山重忠の説得が効を奏し、頼朝が折れることになっているが、その時の重忠の言葉にそれがしがもとまいりて候（流布本、給はりて候）所領をまいらせあげ（返上して）かれらをたすけ候ひてこそ、人のおもわくも候へ（納得することもあるのです）

というのがある。これは頼朝が重忠に、「武蔵二十四郡」をお前にやつてでも、兄弟の命はこちらに貰いたいという。強い発言をするのに対し、重忠が言い返す言葉である。いわば所領を賭けての、兄弟の命のやり取りである。

真名本では由比の浜の場面で、所領を賭けて兄弟の命乞いをするのは、畠山重忠ではなく、継父の曾我助信であったことが、母親の言葉として語られる。そのとき頼朝は

其程忠_{まほ}、二人の子共預_ま預_まと助信に被_レ仰下_一とあり、頼朝が「謀叛人（の）孫小共」二人を、助信（祐信）に預けるといふ形で、事件は落着するのである。

これは仮名本などに冗長に展開する、重忠の術学的言説よりも、よほど真実味のこもる内容である。

助経が河津三郎を殺害した、安元二年（一一七六）から、時代も移り、境遇も変り、幼い子供たちに復讐の念を吹き込んだ母親の気持にも、大きな変化が生じている。子供たちの行く末を気遣う母親らしい気持と、再婚した夫、曾我助信への心遣いには、平穩な生活を乱されたくないとする。女らしい配慮や打算もあるだろうが、それらの全てに覆い被さるのが、頼朝への恐怖心である。そこで継父

助信（祐信）が、幼い二人には命の恩人であることが説き諭され、報恩をこそ思うべきなのに、彼の立場を危機に追い込む「謀叛思（父の敵宮藤助経を討つ企らみ）」などは、とんでもないことだとする、母親の教訓になるわけだ。夫と子供の関係に、頼朝が介在して来ていることを深く恐れている、必死の防禦であるといつてよい。

幼い兄弟には、この母の気持が通じない。まして助信の立場が理解できるわけもなく、語り伝える父河津三郎の雄姿に憧れ、宮藤助経には憎しみの念を募らせる。後には、

互目與_レ目見合、或日上_三山影、或日後竹中忍

とあるように、兄弟は人目を避けて復讐の密事を語り合うが、彼らの姿が見えなければ、母親をはじめ周囲の身内は、一層不安を募らせるという具合で、おそらく『曾我物語』の暗さ、陰惨な雰囲気は、真名本のこの巻で、一つの頂点に達するといつてよい。

『切兼曾我』（謡曲）、『二満箱王』（幸若舞曲）で知られる、由比の浜の場面を直接には描かず、母親の言葉に語らせるなかに、身内の人々の心に陰を落す、頼朝への怖れの感情が、強く印象づけられるような、巧みな筆の運びといえる。

『曾我物語』諸本の発端で語られる、頼朝流離の物語は、『源平闘諍録』『延慶本平家物語』『源平盛衰記』にもある話で、『曾我物語』のみが、特にこの類の説話に深く関るとはいえないようだ。この頼朝流離の物語の一部にある「夢合」は、幸若舞曲では単独のレパートリーにもなっている。

「夢合」も伝承にいくつかの異同があり、細部は一定しないようであるが、頼朝の未来の繁栄を象徴するような夢を、頼朝と足立藤

九郎盛長が同時に見、懷島平權守景義が夢合をする話である。单独にあれば、頼朝個人の神聖性の証となるような短い物語で、『曾我物語』の中では、一見無関係の話のようにも見える。しかし『曾我』の世界を覆う、頼朝の影の濃さと呼応連動させて考えれば、外來の貴種を受け容れる在地の側の物語として理解され、曾我兄弟の運命の発端に関わる、深い意味合いを持たされているのに、気付くのである。

真名本では頼朝と盛長だけではなく、万寿御前（北条政子）までが夢を見ることになっている。その夢は、頼朝治世の後、彼女自身が日本国を知行することを予告する夢である。その万寿御前については

於日本唐兩州施賢女名譽、爲末代女人難有手本ナリ

と記すなど、ここにも〈女人の意志〉の参加を認めないわけにはいかない書きぶりがある。このような特徴は、巻第五から巻第六に至る、三原・長倉の狩倉から、宇都宮を経て那須野に至る、頼朝の一連の狩倉物語の中にもある。宇都宮朝綱の女房が、北条政子以上だと賞讃され、先にも述べた「常陸国伊澤郡六十六郷」を贈ったなどの話である。

だが今問題にしたいのは、懷島景義の「夢合」である。自明というより、必要ないからであろう。仮名本には懷島平權太景義が、鎌倉権五郎景政の「末葉」であることを記さない。在地の人こそ関心を持つが、圏外者にはどうでもよい、特別な記述は省くのが、仮名本全体の傾向であるから、「権五郎景政」の名も削られたものと思われる。

この景政は桓武天皇后裔の平氏で、相模国の開拓者である。『奥

陸話記』にも逸話の出る豪胆な勇士で、後に御霊大明神として祀れる人物だ。大庭・梶原・長尾氏などの始祖でもあり、歌舞伎ファンなら、「歌舞伎十八番」の一つ『暫』の主人公として、すぐに思い浮かぶ名前でもある。

景政より数代さかのぼる村岡五郎忠通は、桓武天皇四代の後胤で、『統群書類類』（巻第百卅八以下）所載の系図に依れば、関東の名門和田・三浦・北条・畠山・千葉・梶原・大庭・曾我・長尾などの各豪族は、皆この人物を始祖としている。関東では平氏が強かったのである。村岡五郎・鎌倉権五郎が、共に御霊神とされるのは、柳田国男説にいう、〈五郎〉から〈御霊〉への転訛もあるだろうが、重要なことはこれらの人物が、在地武士団の祖先神でもあったことである。

流離する貴種頼朝に、景政の子孫景義が馳せ参じ、夢合をして、未来を予祝するとはどういうことか。大庭氏は景親が、頼朝挙兵の折、伊東祐親と共に頼朝に敵対しているので、一族内部の事情は複雑であるが、物語の文脈にこれを置き直せば、在地武士団の由緒ある部分が、頼朝を新しい神（支配者）として、迎え奉じる意志を示したことを意味するのではなからうか。

仮名本では、流人頼朝のもとに、御気嫌伺いにも参り馳せ参じるのが、この景義で（巻第一）、このように、在地の神の子孫である大庭氏一流の景義が、何者にも先立ち、流人頼朝に急接近する姿は印象的である。

この懷島の平權守景義は、頼朝が政権を取って後、「夢合」の恩賞として、鶴岡八幡の若宮の俗別当になり、神人総官の職を賜るうえ、分散していた領地大庭の御厨を、ひとまとめにして賜り、さら

に莊園、田畠、牧場の多くを手中に収めたという。「随分稠者誇朝恩耻」(随分の切れ者で、朝恩に誇ったのは、目出たいことだ)と真名本には記す。彼は源家の守護神、鶴岡八幡宮の、若宮の別当職に納まってしまったのである。

「夢合」は事実を語るものとは思えないが、頼朝に接近して行く、在地の人々の精神性を物語るものとして、無視できないのである。

真名本には景義の夢合の後に、万寿御前の「知行日本国」の夢合(この夢合をするのは、頼朝自身である)が加わる。作者の目は頼朝の存在を超え、遙か後の世の成り行きに焦点を合せている気配があり、ここにも女の存在の重さを感じている風がある。流離して外界から訪れる貴種は、在地の有力豪族の女と結ばれて、その地の支配者となり得るといふ、伝統的図式が現実化したことの結果と、その後の鎌倉政権のなかで、北条政子の占める位置の大きさを認知してのことであろう。貴種頼朝といえども、有力豪族の「女」の協力なくしては、優位に立つことはできない。在地社会の特殊な現実を、〈女の力〉と感じていることの現れである。

この物語を読み進めるうち、思わずはっと息を呑むところがある。それは灌木を押し分け山道を登るとき、突如眼前が開け、周囲の状況が一挙に把握できたとき味わう、あの感動に似ていると言ってよいであろうか。

筥(箱)根山を脱出した筥王(五郎)は、北条時政の館に入り、時政を烏帽子親に頼み、元服する(巻第五)。これが母の怒りに触れ勘当となり、行く場を失った五郎は、兄の十郎と共に縁者を頼り、転々と泊り歩くのであるが、このくんだりで、兄弟の存在を支える、

物語の世界の地平が、一挙に見えて来るのである。その止宿先は相模の有力豪族を、殆ど尽しているといつてよい。三浦・和田・渋谷・本間・海老名・渋美・早河・秦野・北条・岡崎・松田・中村・横山・鹿(狩)野、畠山や梶原の名も見える。これらのほとんどが伊藤一族と、何らかの形で血縁の關係を持っているのである。それは女に依り結び合わされた網の目のようなもので、在地の武士団がいざという時に備え、婚姻で形成した血縁關係を、如何に重要視していたかを窺わせるのに充分である。

巻第五には、「同心、有便宜一申訴詔一被思合引助」とあって、これらの豪族たちが、機会を見て頼朝に訴訟し、兄弟のために失った旧領の一部でも回復できるよう、取りはからいと考えていたことを記す。頼朝との關係から見れば絶望的であるが、兄弟は在地武士団の間では、決して孤立無援ではなく、むしろ兄弟を取り巻く在地の人々の感情に、頼朝と齟齬するものがあつたことが、それとなく物語られていっているといつてよい。

巻第七になり、頼朝の兄弟に対する嫌悪感が、初めてあからさまに描かれる。頼朝の一行を追って、兄弟が富士の裾野の狩場に姿を現わした折、早くも情報を得た頼朝が、不快の感情を露わにし、誑して由比の浜におびき出し、斬るべしと、梶原景季に命じらるる。頼朝の不快の感情は、「奴原の有様を見ると、我が子を殺した、昔の伊東入道の振る舞いが思い出される」というものであるから、宥めようもないほど、決定的な響きがこもる。

同じ「由比の浜」の事件といえ、先にも触れた『切兼曾我』『一万箱王』に相当する挿話があるが、真名本『曾我物語』が、巻第二でこれを正面から描くのを避けたのは、東国武士団に君臨する

頼朝を、王者の風格を持たせて描こうとする。作者側の意図も手伝つてのことではなかるうか。狩場に姿を現わした兄弟は、もう無力な幼児ではなく、復讐の意図を持つ立派な青年であるから、これを排除しようとする頼朝の嫌悪感も、また正当な感情だとされる所以である。

頼朝の屋形に乱入して捕えられた五郎が、直接尋問を受ける折、彼は「方々以意根（遺恨）深候」と言い、「現討二千萬人の侍共一自は候も、汚三君一人一進、後代留名候もと存候」（千万人の侍どもを討つより、頼朝一人を討つて、後代に名を留めたかった）と言いつつ、これに対し頼朝が、悪びれた色を見せまいとして、敢えて言った言葉であろうと、その武士らしさを評価し、「命を助けて召し仕おう」と応じたのは、王者の風格から発したフィクションで、決して真実とはいえない。この頼朝の矛盾を衝くのだが、梶原景時で、彼の一言で五郎は斬られることに決まるのである。

この場面では頼朝と五郎は、本音をぶつけ合い対決できるような、対等な位置関係にはない。物語はそもそもの発端から、頼朝を運命そのものの如き存在として絶対化し、位置づけて来た。

作中に屢々語られる、箱根権現信仰や、縁起物語で、『神道集』との共通唱導部分を含むところから、真名本十巻本の作者を、箱根権現の山僧・天台系の唱導僧とする説（角川源義『語り物文芸の発生』など）が、今日では有力である。在地社会の世俗的権威頼朝に神聖性を付与しようとする傾向は、これらの人々に依るところが大きいように思われる。

しかし一方には兄弟の母親の往生譚や、十郎の恋人虎の活躍などに、時衆教団に属する比丘尼衆の面影を見ないわけにはゆかない。

女性の意志やエネルギーが、この物語の成立には相当深くかかわっているのである。

在地の武家社会に起った復讐事件は、領地問題から発生した。領地はこの物語の隠れた主題の一つであることは間違いないが、後の幸若舞曲『十番切』にもあるような、五郎の頼朝に対する正面切った抗議のようにはなり得ないところがある。受ける側の得意と名誉、第三者の羨望に支配者の気まぐれと、さまざまな側面を見せつけながら、領地問題は在地の人間生存の実質から遊離して、物語的虚構の中での象徴物として扱われる方向を目ざそうとする。そしてこれは頼朝の絶対化に比例しているのである。一方では在地性という、地味な現実を踏まえながらも、一方ではかなりの虚構化が仕組まれるところに、真名本『曾我物語』の特徴がある。

武家社会に起った事件を扱いながら、武家の視点からやや逸れたところに、作品が成立しているのは、やはり物語の管理者の性格によるものと思われる。

(注)頼朝流離物語の一挿話として、頼朝が北条政子と結ばれる前に、伊東入道の姫と結ばれ、一子千鶴御前を設ける話がある。平家の全盛時代で、流人頼朝を婿に持つのを憚る伊東入道は、姫を頼朝から取り返し、江馬次郎に嫁がせ、千鶴御前を殺害するのである。

本文中の引用は、角川源義『妙本寺本曾我物語』による。